1.早朝の特訓

彼女がやってきたのは、冬真っ盛りの朝6時だった。期末テスト当日に塾を開けて、授業をしてほしいとせがまれたのだ。

うちの塾では、テスト当日の朝に早朝特訓と銘打って、朝早くに教室を解放して授業をやったり自習をさせたりしていた。ただ、学校によって、定期テストの日程が合わない場合には開けない時もあった。そうそう連日私も早起きできないし、バイトの大学生に無給で頼むわけにもいかない。当日は私より彼女の方が早く教室に着いた。

「遅いよ、せんせぇ、寒くて凍えそぉ」
身体を縮こませながら、その場で足踏みして紫色の唇から文句を言う。
「お前、早すぎなんだよ。冬の朝6時に起きるのは大変なんだから。ギリギリに来てくれないと」
「あたし、ちゃんと起きたもん」
赤坂みちるは、少しむくれて言った。
「早く起きてもいいけど、来るのはギリギリにできるでしょ」
「話はいいから。中で聞くから、早く開けてってば」
眉根を寄せて乱暴な口を聞くので、慌てて鍵を開け二人して教室に入る。

入り口付近の一番小さな部屋に脱兎のごとく入った赤坂みちるが、すぐに暖房を入れた。ここは、生徒が一人入れるだけの狭い個室のような教室だから、暖房の効きが速い。彼女が白いファーの上着を脱ぐと、中から紺の制服が現れた。

実際に勉強できるのは2時間くらいだが、一夜漬けならぬ早朝漬けは、生徒からかなり人気だった。習ってすぐだと忘れないから、テストのときスラスラ解けるそうだ。早速みちるが希望する2次関数の変域を取りあつかう。ホワイトボードに予想問題を書いて、彼女にやらせる。

「せんせぇ、わかんない」
「お前、読んでないだろ。見ただけだろ。問題をもっとちゃんと頭の中に入れてー」
「だって、わかんないんだもん、あたしバカだから」
赤坂みちるは、すぐむくれた。ここで言い合っても仕方がないので説明してやる。ところが、聞いていないのは明らかで、死んだ魚のような目で私をじっと見る。
「お前、聞いてる？開けろって言ったのは、お前なんだぞ」
イラついた私は、振り向いて罵言を浴びせた。

「先生さ、やらしいってうわさだよ」
唐突におかしいことを、赤坂みちるが切り出した。

「は？」
「だからー、Hだってことっ」
私がみちるをまじまじ見ると、彼女は視線をそらして少しうつむいた。いつも悪態をつくみちるだが、恥ずかしさが先に立つのだろう。彼女の悪態には私も慣れっこだったが、ダイレクトに下ネタを言われて、返す言葉が遅れたし、うつむく彼女の姿を目の当たりにして、加虐心がにゅっと身体の奥に立ち上がった。
「僕がいやらしかったら、どうするの？」
じっとしていた彼女の身体が、ピクリと反応した。
「わかんないっ」
語尾を強めて、つっけんどんな返事をしてくるが、視線を合わさずむくれる。紺の制服の襟元から白い首筋が見え、うっすらと汗が滲んでいた。先ほどの加虐心が太い棒状になって、熱く身体の中で育っていく。みちるの隣に腰を下ろして、彼女の耳元に唇を寄せた。
「気持ちよく‥なりたい？」
優しく問いかけると、彼女の耳がみるみるうちに、かあーと赤くなる。
「みちるの耳、こんなに寒い冬だから真っ赤になってるのか、ここの暖房のせいなのか、まさか恥ずかしいからとか？」
「やだ、知らないっ」
みちるは距離を置こうと体をずらしたが、私はにじり寄った。彼女が舌をちろりと出して、自分の唇を舐めた。
「みちるの唇柔らかそう。すごく可愛い」
「先生やらしいよ」